



FD

第10回

学生の声

コンクール

2017

Hosei University Student Opinion Competition for Faculty Development

2017年度(第10回)のキーワードは「時間」「可能性」。

第10回を迎えたFD学生の声コンクール。第9回に引き続きキーワード方式で作品を募集しました。今年のテーマは「時間」と「可能性」。「時間」と「可能性」は十人十色。大学という多様性に満ちた環境においてのさまざまな「時間」の中で、自分の学びの「可能性」そして未来の自分の「可能性」という切り口から大学生活を振り返り様々な視点から表現した作品が数多く届きました。共に学ぶ仲間や後輩へのエールになるだけでなく、それを支える教職員への大きな刺激にもなっています。

授賞式講評

受賞者のみなさん、おめでとうございます。今年10回目の節目を迎えました学生の声コンクール(以下声コン)は応募総数40作品、そして昨年から始まりましたFD川柳は応募総数139作品でした。このようなたくさんの作品の中から声コンは、最優秀賞1作品、優秀賞6作品、佳作10作品、川柳部門はFD川柳大賞1作品、佳作11作品、入選23作品を選出しました。

今年度の作品には主に2つの特徴がありました。1つ目は、声コンと川柳の作品が全体的に素晴らしかったことです。学生の声コンクールは、昨年度から受賞者の声をもとにキーワードを設定し、それに関する作品を募集しています。今年度は「時間」と「可能性」という2つのキーワードでした。応募して下さったみなさんが、この2つのキーワードから独自の切り口で作品を描いてくれました。特に受賞作品を見ますと、自分の体験の中から、その時の一瞬一瞬の場面が目につくような、とても臨場感あふれる書き方をしている方が多かったように思います。読みながら、自分もその場にいるような、その時の気持ちを共有できるような感じがしました。川柳についても、575の短い文字数の中、場面や時が浮かぶような作品が多かったように思います。声コンが学生からの応募のみ受け付けるのに対し、川柳は教職員も応募頂けますので、思わず「そうそう!」と言ってしまいそうな作品がありました。

2つ目の特徴ですが、昨年と比べ、声コン、川柳とも、より多くの学部/学生とより多くの所属の教職員からの応募がありました。昨年よりも声コン・川柳が学生・教職員に浸透していることの表れだと言えます。声コン・川柳を開催する一つの大きな目的が、作品を通して法政大学の教育・授業を見直していく機会であるということであり、そして法政大学のFDは学生だけでなく教職員も一緒になって支えていくことが特徴であるため、多くの方から応募があったことは喜ばしいことだと思います。

昨今は、SNSが普及し、毎日文字をスマホで打つもの、とても短い文レベルでのメールの交換が主流だと思います。短い文は打つもの、川柳を作るかといえばなかなかそのような機会もないかと思えます。ましてや、授業のレポート以外で長い文章を書く機会も少ないのではないのでしょうか。今回応募して下さった方にとって、法政大学での一場面を切り取った作品は、大学生活において必ず貴重な宝物になることと思います。また、2017年にこんなことを考えていたなという場面と共に作品がずっと記憶の中に残ることでしょう。そして、その作品の読者も思いを共有し、自分の大学生活や学びを考えるきっかけになると思えます。10回を迎えた学生の声コンクール、そして2年目の川柳をさらによりよい機会となりますように私たちは考えていきたいと思っています。どうぞ来年度の声コン・川柳に期待してください。今回応募して下さった方々、そしてこの新聞を手に入れている方々、来年度の声コン・川柳でお会いしましょう。

※学生の所属・学年等、本紙面に掲載した情報は受賞時のものです。



「偶発的なわたし」

社会学部1年
加藤一徳

皆さんは、時間の使い方についてどのように考えているだろうか。大多数の大人は、以下の言葉を生徒や、子供に言うだろう、「時間は大切に使うんだぞ」「将来のことを考えてしっかり計画を立てなさい」「無駄な時間を過ごす後悔するぞ」。彼らの考えは確かに正しい。早めに自分のやらなければならないことを見つけ、時間を大事に活用していくことは、我々が社会生活を円滑に進めるために重要なことである。しかし、私は多くの人々の非難を承知であえて言う、「時間を浪費せよ」と。私もかつては、時間は大事にしなければならぬと頑なに信じていた。時間は有限なのだから決して無駄にせずやるべきことをなさねばならないと思い、私は高校生活の大半を受験勉強に費やしてきた。

しかし私は受験勉強に失敗した。今まで志望校に受かるためにあらゆる無駄を省いて勉強をしてきたのに……。私の人生は無駄に終わってしまうのだと絶望した。浪人を決意したものの、己自身の劣等感でまともに勉強もできず、家にも勉強できそうもないのでふらふら本屋で無為な時間を過ごしていたとき、ある本に出会った。ジャン＝ポール・サルトルの『嘔吐』である。私はこの本を読んで、目の前の世界が変わった。この本の主人公であるアントワーヌ・ロカンタンは、己の存在が偶発的なものであることに気づき、絶望する。彼が抱いていた「嘔吐」感に、当時の私は強く共感したのである。しかしそうであるからこそ、自らの可能性を自由に求めることができるのだと気づき、空虚だった私の人生の中に、一抹の光、とても小さいが、ほかの何よりも輝いている光を、私は見つけたのである。

時間を大切に扱えず、あらゆるものに必然性を求めようとする行為は、かえって我々が自分自身に誠実に生きるための感受性を損なわせ、人生を薄っぺらく、貧しくしてしまうことだろう。自分にとって完璧な時間を求めるということは、裏を返せば、その他の可能性をかなぐり捨てるといって他ならない。自分の心に保守的であることを認めることに他ならない。

法政大学に入ってから約半年、かつての私では想像できないほどに私は変わったと思う。

受験時代に抑制されていた読書欲は滝のように流れ出て、私の乾ききった精神をみずみずしくしてくれた。多くの人(教授や同輩)の考えに触れるたびに感動したり、時には憤慨したりもするが、単色で塗られていた私の人生は今、その本来の色彩を取り戻し、新たな色を付け始めている。気が向いたときはすぐにでも外へ出て、知らない土地で私の知らないことを探しに行っている。サークル活動では、多摩キャンパス周辺の地域に住む人々とお話したり、そこで行われている祭りに参加したりして、活発な交流を楽しんでいる。受験時代では不必要と考えていた学校での発言も、積極的にすることができている。大学生活で私は積極的に時間を「浪費」して、そこでの発見に日々感動しているのだ。

ある1つの必然的な時間と必然的な可能性を追い求めるかつての私はもういない。今の私は、無限の可能性に身を投じ、偶発的な時間を全力で楽しむ1人の学生である。

● 講評 ●

現代社会はTime is moneyというメタファーにもとづいて「浪費」、「無駄遣い」される時間を否定する。本作は知的かつ行動的に時間の無駄遣いを肯定する。自分の時間をどう生き、どう意味づけるかは自由、という開放感を得るまでの行動や心理の過程が鮮やかに描かれている。



作品募集テーマ決定!

「多様性」and/or「空気」

これらのキーワードから1つまたは2つを選び、授業に関するエピソードを作品にしてください。形式は自由です(ただしA4用紙1枚以内、日本語に限ります)。これらのキーワードを使用しなくても構いません。作品の内容にキーワードに関する内容が含まれていれば結構です。

応募の詳細は2018年7月頃にお知らせします。



FD

学生の声

コンクール

2018